

1. 授業の概要と地域社会を意識した工夫

本授業は小学校・中学校教員免許必修科目である。新課程の学生（2回生以上）を対象にした授業であり、受講生は72名であった。

道徳教育の制度的な位置づけや教育内容の理解だけでなく、指導法まで学習してもらうべく、3つのステージで構成されている。第1ステージでは、道徳教育の学習指導要領上の位置づけや歴史的変遷、諸外国との違いについて講義する。第2ステージでは、道徳教育に関する理論や方法を紹介するとともに、それをふまえて学習指導案を書いてもらう。第3ステージではそれまでの学習を基に、資料の様々な活用を考えたり、模擬体験をしたりするなど、応用的な学習を組み込んでいる。

本年度は、愛媛県／松山市（地域社会）を意識して、以下の3つの工夫を紹介する。

①「フィールド演習」の成果の活用

2015年度の「フィールド演習」では、道徳の教科化において注目される「問題解決的な道徳授業」に基づく授業を構想し、大学院生に松山市のいくつかの小・中学校で実践してもらった。その過程で問題解決的な道徳授業の課題を確認した。十分な問題発見をせずに、問題解決を促しても道徳的価値の理解を深めることができないという課題である。筆者はこの課題を考察する際に、問題解決学習の理論的背景にあるジョン・デューイの著作（たとえば、『思考の方法』）から示唆を得た。

本年度はここから得られた知見を基に、「手品師」という有名な資料について、一般的な活用の仕方（誠実＝約束という解釈）、問題解決的な活用の仕方を学生に考えさせ、それらの意義と課題を紹介したうえで、第3の活用の仕方を示した。学生はひとつの資料を様々な活用できることを学ぶことができた。

このように地域の小・中学校での授業実践を核として、道徳教育をめぐる議論を整理する示唆を得るとともに、大学授業をより厚みのあるものにするのができたのである。

②地域の人材を活用した授業

本授業では実地指導講師の制度を活用して、

愛媛県内の校長先生に道徳教育の現状と授業実践のあり方を講義してもらっている。

本授業の受講生は2回生が中心であり、教育実習や具体的な授業のイメージが固まっていない段階である。そこで第2ステージの指導案を書かせる前に実地指導講師の講義を配置することで、地域の実態や指導技術・方法、授業づくりの視点を理解してもらっている。自分が将来教壇に立つかもしれない身近なモデルに接することで、第2ステージの道徳教育理論・方法の学習を有意義にすることを狙っている。

また、実地指導講師の講義は、大学教員（＝筆者）にとっても大いなる刺激となる。なぜなら、道徳教育の理論や方法を原理的に解説するとき、常に実践との結びつきを意識せざるを得ないからである。受講生にとって授業実践に関する参照点ができるために、大学教員の講義内容はその参照点から相対化されてしまうのである。それゆえ、筆者は実践的な方針を与えるにしても、既存の実践を批判的に捉えるにしても、当該の実践を意識して講義内容を組み立てなければならなかった。

③地域の教材を活用した授業

2016年度は愛媛県において全国小学校道徳教育研究大会が開かれた。その中で筆者は「へこたれんぞな」という郷土資料を使った授業実践に接することができた。「へこたれんぞな」は愛媛県教育委員会が作成する道徳資料集「愛ある愛媛の道徳」に所収されている資料である。愛媛県ゆかりの正岡子規が、病気による死の危機に曝されながらも俳句を広めるために奮起した姿を描いている。

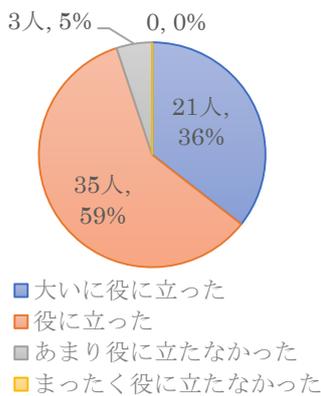
本授業では、実践者の許可を得て、実践を文字起こししたプリントを配布し、受講生に授業検討会を模擬体験してもらった。具体的には、KJ法を用いてよい点・疑問点をグループでまとめさせ、代案まで提示させた。その中でインタビュー形式や切り返し発問など、授業技術・方法を学んでもらうとともに、単なる非難ではなく、責任を持って授業改善に貢献することの重要性を説明した。

2. 授業アンケートの結果

授業アンケートでは上記の②および③について調査した。有効回答は②の設問については59名、③の設問については48名であった（無記名）。

②実地指導講師による講義が「役に立ったか」という設問に対しては、「大いに役に立った」が21人（36%）、「役に立った」が35人（59%）と多くが肯定的であった（図1）。

図1 実地指導講師の講義は役に立ったか



また、そのうち「何が役に立ったのか」という設問に対しては、多くの学生が「授業づくりの原則」や「役割演技などの具体的な工夫」を知れたと回答している（表1）。講義内容に役割演技を用いた授業原則の解説があったためだと考えられる。また、講義内容には、地域学校の若手教員による授業記録の視聴も含まれていたため、「将来の教員イメージ」がついたと答える学生も多かったと思われる。

表1 ②について、「何が役に立ったのか」

授業づくりの原則を知れた	35人
地域の学校の様子を知れた	17人
役割演技などの具体的な授業の工夫を知れた	30人
道徳教育の改革状況を知れた	6人
将来の教員のイメージがついた	16人

③郷土資料を使った授業実践の検討が「役に立ったか」という設問に対しては、多くが肯定的であったが、「大いに役に立った」と回答する数は少なかった（図2）。

また、そのうち「何が役に立ったのか」という設問に対しては、多くの学生が具体的な授業の工夫を知れたと回答している（表2）

が、「他の人の意見を聞き、学びを得ることができた」との回答が最も多い。これは、授業検討会の模擬体験を通じて、互いに授業の改善案を考え合ったからだと思う。教育実習前の取り組みとして、受講生にとっては魅力的であったようだ。

他方で、ねらいとしていた「地域の特性に応じた資料」については、それほど回答が得られなかった。授業のコメントシートを見る限り、「へこたれんぞな」という資料自体への評価が低い。資料で扱われている正岡子規についての背景知識や郷土資料の作成の難しさなども併せて講義することが必要だと思う。また、今回は文字起こしをしたプリントを配布したため、実際の授業風景がイメージしにくかったことも影響していると思われる。

図2 郷土資料を使った授業実践の検討は役にたったか

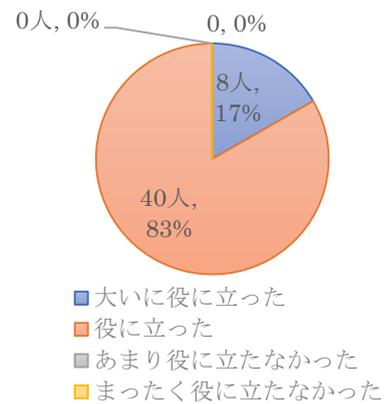


表2 ③について、「何が役に立ったのか」

授業づくりの原則を知れた	18人
地域の特性に応じた資料のあることを知れた	15人
インタビューや切り返し発問などの具体的な授業の工夫を知れた	21人
将来の教員のイメージがついた	8人
他の人の意見を聞き、学びを得ることができた	22人

3. 地域社会を核とした教育と研究のつながり

筆者は教育哲学を専門領域としている。研究テーマはウィトゲンシュタイン哲学を用いて重度障害児の道徳的地位をめぐる生命倫理学の議論を批判的に検討することである。大学院時代は、具体的な学校教育実践にコミットすることなく、文献精読を中心とした研究

を行っていた。他方で、教職科目担当教員養成に携わる大学教員になるためのトレーニングを受けた(広島大学大学院教育学研究科「教職課程担当教員養成プログラム」)。そこでは授業改善方法について学ぶとともに、教育と研究の結びつき難さについても考えていた。

教育哲学関連学会では、実践志向の教員養成改革の動向に対して、その「役立ち」を論じることが近年増えている。ポストモダンを経験して、教育哲学者は教育理念や思想を大きな物語や「真理」として語り、学校教員を鼓舞することはできなくなっている。筆者も大学院時代をそうした時代潮流の(終わり?)の中で過した。教職科目で実践に「役立つ」知識や指導方法を教えることに抵抗を感じることもあった。

そうした中で愛媛大学に着任した。着任以降、否が応でも道德教育の授業実践を拝見させてもらうことが増え、また具体的な授業開発に携わることも多くなっている。そこでは大学院時代に研究した内容を直接活用することが難しく、道德教育の「専門家」としてどのように「助言」をするのか迷うことも多い。

しかしその一方で、教育哲学関連学会でよく用いられる「実践」という言葉に対する疑問も生じてきた。教育哲学者が「実践に役立つべきなのか」と批判を投げかけるとき、そこでイメージされている「実践」や「役立つ」は、かなり狭いのではないかと。実際、「実践志向」は目的合理的で効率・機能的な社会に迎合するものとして批判される一方で、「実践」の一回性や豊饒さが「実践志向」に対置されることも多い。また、真理を語って鼓舞する教育哲学者イメージに対して、学校教員や教職科目の受講生が暗黙に自明としている教育観を相対化することを対置する教育哲学者は多いが、それも「役に立つ」のひとつのあり方であろう。

筆者は現在、「実践志向」を批判して、教育哲学を孤高な修行のように捉えるのではなく、もう少し柔軟な姿勢が必要だと感じるに至っている。その中で、地域の学校の先生方との出会いや授業実践を拝見させてもらうことは、自身の教育および研究にどのような影響を与えているのだろうか。

たとえば、「道德教育指導論」について。担当し始めて以降、多様な教育方法を実践例とともに紹介することは変わっていないが、最

初、扱う実践例は文献等に記載されているものばかりであった。また、理論的な批判を加えて紹介する場合も、実際の授業づくりの過程や原理を十分に知らないために、空中戦となっていたように思う。これに対して、地域の授業実践に携わることで、アクチュアルな実践例を扱ったり、そこで学校教員が念頭においている授業づくりの工夫をあわせて語ることができるようになった。

さらに、そうした教育の工夫は研究とも関わり合っている。たとえば、1の①で述べたように、問題解決的な道德授業のあり方について、デューイの教育思想に立ち返ることで、実践に寄り添った批判的コメントができるようになった。これは、「フィールド演習」という授業の一環で、地域の学校で大学院生が実践したことに端を発している。地域を核とした大学での授業の工夫に触発されて、研究上の視点が形成された事例である。また、「へこたれんぞな」の資料を活用することの意義を考慮したときに、友情など児童生徒に身近で生活経験を多く語ることのできるテーマと、生命尊厳など児童生徒の生活経験から十分に語ることのできないテーマがあることをふまえて、資料の水平的／垂直的な活用のあり方を考えたことも、そうした事例だと言えよう。授業実践を孤高な立場から批判するのではなく、その授業実践を無批判に賛同するのではないスタンスがあるように思われる。

とはいえ、授業実践に携わることで、研究のもともとの関心が見失われる可能性もある。また、実際の実践に短期的・直接的な効果をもたらそうと考えてしまうならば、早急な結論を導いてしまう危険性もある。現在のところ、授業実践に携わることで、研究上の視点が切り開かれる可能性がある、という程度で捉えておきたい。